

リカでは西部開拓が終了し、新規移民を必要としなくなっていた。後の日本人排斥の動きはこの時すでに芽生えていた。

開拓農民や労働力としてハワイやアメリカ本土へ移民した多くは、過酷な労働や自然という厳しい生活の中でお互いに助け合うようになり、「日系人コミュニティ」が形成され、日本語の新聞雑誌が刊行された。



現在のリトルトーキョーの様子
リトルトーキョーの再開発にあたり、その一部が保存地域に指定され、当時の面影を残す（ロサンゼルス）

2 排日運動期

一攫千金をめざして、いつかは故郷へ錦を飾ることを夢見ていた移民たちは、低賃金で懸命に働いた。その上、短い期間に日本人移民が集中したことが、アメリカ人には日本人労働者に自分たちの仕事が奪われると映り、日本人排斥の動きが強まる。

1900年になると、日本人排斥運動は組織的に行われ、サンフランシスコ市民大会では日本人労働者排斥が決議される。さらに、1906年、サンフランシスコ教育委員会では日韓学童排斥案が成立し、日系児童は隔離された東洋人学校に強制的に転校させられた。この事件の背景には、日露戦争で勝利を収めた日本人に対するアメリカ人の恐怖心と不信感があったと考えられる。それはいわゆる「黄禍論」である。ジャーナリズムがセンセーショナルな記事を書き立て、アメリカ人を排日へと駆り立てた。日本人は法律で「帰化不能外国人」とされ、第二次世界大戦後まで市民権は与えられなかった。さらに、1世と結婚した2世女性の市民権まで奪われた。

アメリカ本土の1世の多くは農業に携わり、アメリカ西部の農業開発に大きな貢献を果たした。しかし、このことが白人農民の危機感を呼び、1913年にカリフォルニア州で「外国人土地法」が成立する。同様な法律がワシントン州など9州で成立し、日本人移民の土地所有が禁止される。日本人移民たちはアメリカ生まれの2世の子どもの名義で土地を所有することになった。そして、1924年、ついに「排日移民法」が成立し、日本からの移民が完全に禁止される。



土地法の通過によって日系人の眼前で新たな門が閉じられた

2世の人口は1910年～1930年代に増加し、1940年頃には日系人の60%を占めるようになる。2世はアメリカで公教育を受けアメリカ大衆文化を享受しながら、1世の親や日本語学校で日本的価値観や文化を学ぶという、二重の文化的影響を受けて育った。

3 第2次世界大戦期

1941年、日本軍の真珠湾攻撃が行われると、日系アメリカ人は「敵国である日本人」と同一視され、日系人の指導者はスパイ容疑でFBIに逮捕された。翌1942年には、ルーズベルト大統領が大統領行政命令9066号に署名し、西海岸に住む日系人はアメリカ国内10カ所に点在した強制収容所に送られた。アメリカ生まれの2世も同様に、強制収容所に収容された。しかし、同じ敵性外国人であるドイツ系・イタリア系に対してはこのような処遇はされなかった。このことからこの強制収容の背景には、日系人に対する人種的偏見があったことがわかる。



日系人に対する政府命令を伝えるポスター